

IC(イニシアティブス・オブ・チェンジ)講演会レポート

『親から伝えてもらったもの、 子供たちに伝えていきたいもの』

いじめや引きこもり、児童虐待、そして、青少年犯罪に至るまで、青少年に関わる様々な事件や事象が連日のようにマスコミによって報道されています。その度に社会の最小単位の核である家庭での教育の在り方の重要性が指摘されます。そこで、本年は、この家庭・家族の問題をIC活動の年間テーマの一つとして皆様とご一緒に考えていくことと致しました。その手始めとして『親から伝えてもらったもの、子供たちに伝えていきたいもの』のテーマで年代を異にする相馬雪香、高橋久子、堀場明子の各氏からお話を伺う講演会を去る3月13日に開催致しました。今回は、その中から高橋、堀場の両氏のお話しをご紹介します。

高橋 久子

◇親が身をもって教えてくれた事

私が生まれたのは昭和20年大空襲の中でした。生まれるとすぐこうりにいれられ防空ごうの中で殆んどの時を過ごしたようです。

昨今のアフガン戦争やイラクの戦争などをテレビの映像で見ますと、逃げまどう母や子の姿に自分自身のことを重ね合わせて母がどんなに苦勞して私を生み育てたのかを想い胸が熱くなります。それと同時にいつまで戦争が続くのだろうかと暗い気持ちになります。

私の父は国鉄に勤務していました。戦後の混乱した時代に国の経済使節団の一員としてヨーロッパやアメリカを視察した際に父はMRAに出会いました。旅から帰ると私達はまだ小学1年生。妹は幼稚園の頃のことでしたが、日曜日に動物園に行こうと言い出しました。今で言う家庭サービスですが、はじめての事でビックリいたしました。また父は高知県出身で大酒を飲む人で当時住んでいた下北沢の官舎の2階へ芸者さんを上げて宴会を開いていたような人でしたが、その父が突然禁酒禁煙を宣言したのです。それから

の家の中は、がらりと変わっていきました。

一番変わったのは母でした。当時、家族は子供5人と父と母の7人に加えて、お手伝いさん2人に書生さんという大家族でした。母はいつも忙しく、笑うことはなくいつも下を向いていました。その母が突然輝きはじめ、笑顔で私や妹に話しかけるようになりました。小さかった私にとって忘れられない嬉しい出来事でした。



(Photo: 高橋 衛)

■主な内容■

- ◆ IC 講演会レポート・1-7
- ◆ 日本で学んだこと・7
- ◆ CRT ニュース・8-9

- ◆ IC 韓日大学生フォーラムレポート・10-14
- ◆ IC 国際会議のお知らせ・15
- ◆ IC ニュース・16

そして家の2階では、MRAの婦人の会が開かれるようになり母は生き生きと働くようになりました。また家には外国からの青年達が訪れ我が家にホームステイするようになり、その方々が私達を大人のように大切に扱ってくれ話しかけてくれた姿は今も忘れられません。

一方、父は国鉄の内部でも禁酒を宣言して、お酒のない会合を行ったり、労働組合との関係改善にもつくしました。

また「ボス」というMRAの劇の主演をつとめ当時の鳩山首相官邸で上演したこともありました。当時の十河国鉄総裁に信頼されMRAの精神を国鉄の内部に広げていきました。

この時父母の教えてくれた4つの道徳基準がありました。「正直、純潔、無私、愛」この4つの指針が子供だった私の体には自然に入っていったように思います。

この4つの基準に照らして自分の心の中の声を聞くと必ず答えが見つかると思われたことは、私の一生を支えることとなりました。父も母も身をもって私達子供に大切な事を教えてくれたと思います。

◇ 1965年渡米 20才～25才の経験

私が大学3年生だった夏、MRA国際大会に出席することになりました。私は非常に引っ込み思案で心配症の性格でしたから仲々決心がつかないで渋っておりましたところ、母が「あなたはいずれ家庭に入ることになるのですよ、その時大切なことは広い視野を持っていることです」と私の背中を押してくれました。大会に参加して各国からの青年達に会い、いっぺんに目の前が開けていきました。そして、その後の5年間をスーツケース1つですごすことになりました。最初の頃ホームステイした家がニューメキシコ州のサンタフェ郊外のインディアン居留地の中のしゅう長の家でした。陶芸家でもあったポポビデーさんのお宅でまだ言葉も良くわからない私を娘のように大切にしてくださいました。私はアメリカンインディアンの方々が鉄条網こそないけれど居留地の中に囲われている事にショックを覚えました。また、ロスアンジェルス郊外のワッツという黒人街にも行きました。小学校や中学校をまわってお話しましたが、ここでも黒人達は目に見えない囲いにおおわれていました。物質的に豊かなアメリカの知られざる問題の深さを感じて大変驚きました。

私達は、100人位のグループでバスを仕立てアメリカ各地を巡りました。アメリカは当時ベトナム戦争で揺れていて、反戦運動や帰還兵の問題などあらゆる問題をかかえていました。私達は主に2つのメッセージを歌にしてどこへ行っても歌いつづけました。一つは、「Up With People」みんな手をつないで立ち上がろう」という歌。もう一つは「What color is God's skin」神様の色は何色」という歌です。この歌はどこへ行っても涙と嵐のような拍手で迎

えられました。人種、宗教、国、すべてをこえて心の中に沁みこんでいきました。ある時私はホームステイした家庭で小学校2年生の少年に出会いました。夕食後、折紙などを教えながらその少年と遊んでいると、その少年が、「Hisakoは悲しいことあるの?」と聞きました。私はびっくりして黙っていると、急にしがみついてきて泣き出したのです。私はとても驚いて抱きしめてあげました。その少年はこう言いました。「僕のお父さんとお母さんは毎日けんかをしている。どうも僕のせいらしい。そのうち別れてしまうかも知れない。僕のことが邪魔らしいんだ・・・」と話しました。私はどうすることも出来ませんでした。この少年の心の深い傷を見た気がしました。その家を離れる時少年は、自分の写真に名前をしっかりと書いて私に渡しました。そして僕のことを絶対に忘れないでねと言いました。

アメリカでの生活は、私に特に家族の大切さを教えてくれました。お金や物質ではない大切な物があると教えてくれたのです。

◇ 家庭を持つ

1970年にアメリカから帰国後、大学時代に所属していた音楽グループの仲間と結婚し、家庭を持ち、それ以来杉並に住んでいます。結婚するとすぐに寝たきりのしゅうととその看病に疲れたしゅうとめとの生活が始まり、年令的にも70代と20代という差がありカルチャーショックはかなり大きいものがありました。でも、100以上のホームステイをし、あらゆる種類の人々と出会ってきた経験は、私にとってこの難題をのりきるすべてをそなえてくれていました。

また次々と生まれてくる4人の子供達の子育てにあっても母が教えてくれたように、どの子も平等に大人と同じように接する。小さくても1人の人間として接しようとする子供もちゃんとそれに答えてくれました。

私は小さい時、学校は嫌いでも手を挙げたりすることも決してしない子供でした。長男が学校に上がるようになって、自分の子供も学校嫌いになっては困ると思い、自分も学校へ行ってなるべくなじむようにしようと思い、PTAの委員を引きうけたのがPTA活動に入るきっかけでした。PTA活動では、様々な出会いがあり私を成長させてくれました。また自分に思わぬ能力があることも知りました。

多くの出会いとともに多くの友人関係にめぐまれ子供達にとってもありがたいことでした。

中でもいじめについての事件を解決に導いた事をお話したいと思います。学校というところは、外から見ると見えにくい部分が多々あります。私がPTA会長をしていた時、或る晩校長先生から電話がはいる、とても困った様子でこう言いました。「実はいじめに会って不登校になったと親がどなりこんできたのですが、教育委員会にいいつけると言っておどされている」というお話でした。近所にすむ区議

さんへの橋渡しを私に頼もうと思ったようでした。私はこう答えました。「一番大切なのは子供の心です。まず親の気持ちをほぐすために、自分が親だったらどう思うのか考えて見て下さい」と申し上げました。

私は親に対して正直にあやまるべきだと言いました。それから親も担任も校長もみんなが一つになって誰が正しいかでなく何が正しいのかを考えて下さいと申し上げました。その後1ヶ月位かけて、親との話し合い、子供との話し合い、お母さんとの話し合い、担任と校長との話し合い、子供同士の話し合い…と順番にきめこまかくすすめていくうちに、みんながあまりにも互いの立場を知らないことに気づきはじめました。親は先生の立場や苦労をまったく知りませんでした。最後には、「日常自分の子供のことばかり考えていたのではいけないのですね」と父親がいました。母親は「自分は自分のやり方や考え方を子供に押しつけていたような気がする。それも一つの原因だったのですね」と言いました。先生方は自分も親であるのに、先生という建前に立ってしまうと親の気持ちや子供の気持ちが見えなくなっていたと反省しました。

親や先生が仲良く話が出来るとなると子供も安心して学校へ行けるようになりました。

「誰が正しいかではなく何が正しいか」で判断すること、この言葉一つで色々な難題が解決を見るようになります。

◇奇跡のバザー

小学校が40周年を迎えることになりました。その記念として子供達に社会科教材としての記念誌を作ることになりました。この記念誌のための資金がありません。

校長先生から100万円の資金が必要だといわれ、何とかしなければなりません。委員が知恵をしばってバザー開催を決めたのです。ただ絶対に無理をしない、人に頼らない、そして楽しめるようにということで目標額を決め、できるだけいいと思って始めました。まず各家庭にある余り布を提供してほしいと声をかけると何とすぐ20箱以上のダンボールが一杯になりました。次は、手仕事の好きな方々に自由に布地を持って行って好きな物を作って下さいと声をかけると、いつのまにか布地はおべんとう袋や、エプロン、ワンピース、反物は着物になり、みごとな手芸品の数々が集まりました。主婦の能力のすばらしさに感動しました。また一人では出来ないという方達の為に講習会を開き、クリスマスリースや、人形、和紙のはし袋などその場で作りました。また模擬店も出店希望者をつのり自由に店を出してもらい、収益を寄付してもらいました。社宅のグループやスポーツのグループ、おもしろい、やきそば、おもしろい、フランクフルト、豚汁とお父さん達もどんどん加わりました。ケーキ作りの上手なお母さんは喫茶室を開きました。たった2ヶ月の準備で当日は、1000人以上の来場者があ

り目標額の100万円をこえる収益を生み出しました。奇跡とも言えるこの経験は、先生達や父母の気持ちを動かし、それからの協力がスムーズに行くようになりました。お金よりも大きな収穫がありました。それにしても主婦の底知れないパワーにおどろかされた出来事でした。

◇ホームコンサートを開く

我家のホームコンサートについてお話ししましょう。私も主人も音楽を通じて知り合った同士ですから、子供達が小さい時は遠くへ出かけられないので、我家へ仲間を呼んでアンサンブルを楽しんでいました。もちろん家族ぐるみで集まるので、6家族も集まると家は超満員でした。練習をしても譜面台の下には赤ちゃんが這はいししたりしていましたが、ほんとうに楽しいひとときでした。練習の後には持ち寄りパーティで、話はずみませんでした。子供達はいとこ同士より仲良く育ちました。またクリスマスには、ファミリーコンサートと称して全員が何か演奏したり歌ったりのコンサートを開きました。

子供達が大きくなり巣立っていくと、こんどは、プロの演奏家を呼んで地域の方々に声をかけホームコンサートを開くようになりました。家庭でのコンサートでは、演奏家と聴き手がひとつになれるという貴重な体験が出来ます。家庭の生み出す力とは無限大だと思います。

◇家庭の大切さ

家庭という場から生きる力が生まれるように思います。助け合い、いつくしむところ、愛をはぐくむ場。あらゆるエネルギーの原点が家庭にあるような気がします。失敗や挫折をいやすのも家庭の力。家庭の大切さを子供達に伝えていきたいと思っています。

◇戦争も平和も人の心の中から生まれる

世界には戦争がなくなる現実を私たちはどう受けとめたいのでしょうか。戦争は自分から遠くの出来ごとと考えがちですが、決してそうではありません。身近な心の中にひそむ「まあいいや」とか、「人が見ていないからいいや」とか、「あの人が悪いので自分は悪くない」とか思う心から問題が起きていきます。「自分さえ良ければいい」、「自分の子供さえ良ければいい」という考えが少しずつ社会をむしばんでいきます。私達は心豊かでほんとうに助け合える平和な社会を望むなら自分の心にいつも正直に暮らし、子供達にその姿を見せなければいけないと思います。

たかはし・ひさこ 1945年生まれ。大学3年生の1965年にMRA(現IC)国際大会出席のため渡米。以降1970年までMRAの国際プログラムに参加し、アメリカ各地、イタリア、アフリカ等を歴訪。1971年に結婚、4児の母となる。小中高と20年間にわたりPTAの役員を務めた。

堀場 明子

1960年代にMRAの活動をしていた八木洋子の娘で、堀場明子と申します。「親から伝えてもらったもの」というテーマですが、親から伝えてもらったこととは、親の生き方、姿、行動を幼い頃から見、聴いて、自然と子供の心に入ってきたものだと思います。これは、こうなさい、あしなさいというのとは違うということです。毎日接し、大人への道の中で最も影響力が強いのが、親と子の関係ですから、心に伝わってきたことは、人生に大きな影響を及ぼすことはいまでもありません。親から伝えてもらったものは、目に見えるわけではありませんが、どれだけ私の人生に大きな影響を与えているか、あらためて振り返ることができました。この機会を与えてくださった国際IC日本協会に心から感謝しております。

この振り返りの作業は、忘れていた感謝の気持ちを取り戻し、次への希望を与え前進できる一つの方法だと思っています。私の人生の振り返りの作業を、子供の生き方への親の影響の一つの例として聴いていただければと思います。

◇私のプロフィール

私のプロフィールを駆け足で追った後、どうしてこういう道に行くことになったか、親から伝えてもらったことがどのように影響しているかを振り返ってみたいと思います。

私は、北海道で生まれ、京都で育ってきました。小学校、中学校、高校と聖母学院というカトリックのミッションスクールにて学び、いじめとは縁遠い、明るく楽しい学校生活を多くの友達に囲まれ過ごしてきました。何不自由なく、元気に過ごしていた私は、テレビやビデオなどで、戦争で苦しんでいる子供達が世界には大勢いることを知り、小さい頃からずっと、紛争解決の仕事がしたいと思ってきました。平和という言葉が私のなかでキーワードとなったのは、カトリックの学校のおかげで知ることができた、アジジの聖フランシスコの「平和の祈り」を聴いたときです。そんな私が神学部の受験を決心したのは高校3年生、紛争解決の仕事をするためにはどんな勉強をすれば良いのか迷った末のことでした。それまでは、政治学や経済学、国際関係学などを学ぶべきだと思ってきました。しかし、まず、どのような社会が素晴らしいのか、人間はどう生きていくべきなのかといった哲学的なことにも興味があったこと、歴史が好きなこと、宗教戦争の原因である宗教を、宗教感覚のない日本人も学ぶべきだと思ったこと、また、自分の中に一つ価値基準を持ちたかったこと、そうすれば、他の価値観を知ったとき比較しやすいと思ったことなどの理由で受験し、今、神



(Photo: 高橋 衛)

学の勉強を終え、心から神学部を選んで良かったと思っています。イタリア、ローマへの留学も、大学卒業後のアメリカ、ケンブリッジの大学院への留学もすべてが、素晴らしい経験でした。なにより、世界中に友達ができたことが人生の財産となりました。私は運がとても良く、両親の理解と協力、素晴らしい人々との出会い、友人の助けのおかげでここまでこれたと感謝しています。大学院も無事卒業し、帰国してまもなく現在働いている日本国際交流センターでインターンとして仕事をし、人間の安全保障の概念の浸透のためのプロジェクト、エイズに対する日本の対外政策に関するリサーチに関わりました。一から百まで学びの時間を過ごせています。この仕事のおかげでさらなる問題意識が明確となり、自分の使命は何か、自分が学んできたことをフルに生かせるのは何か、何をすることが平和のために役に立つかと考えた末、今度は、さらに具体的に地域をしばり、紛争解決のための方法を考えていきたいと思い、博士課程に進学することにいたしました。留学の経験から、自分がアジア人であることを自覚し、これからはアジアとの関わりが日本にとって欠かせないと思い、特にインドネシアのマルク地方をケーススタディーとし、外国語学研究地域研究専攻を選び、これもまた、無事に合格できました。本当に何から何まで、私は本当に恵まれているなとつくづく感じると共に、これら与えられた事を何かに役に立たせねば、すまないという気持ちでいっぱいになるのです。こんなに幸せに何不自由なく生きてこられた自分がおもまた、自分だけのために生きていたらそれこそばちがあたると感じます。このように紛争解決の仕事、平和のために何か少しでも貢献したいと思うようになったのは、もとをただせば、すべて、両親から伝えてもらったことと関係があると思っています。

◇父からの影響

私の父は、京都生まれ、京都市育ちの今にしては珍しい強くて厳しい典型的な亭主関白で、この父と今も寄り添っている母を尊敬します。でも私達子供の面倒はとてもよく見て

くれました。私たちのことを心から愛し本当によく遊びに連れて行ってくれました。また、父は勉強熱心でかなりの読書好きです。そんな父は、われわれを前にして政治・経済・歴史の話をよくしてくれました。毎週日曜日、テレビの政治経済の討論会をみては、それにまつわる基礎知識、今の状況、これからの課題など、詳しく何時間も教えてくれました。父は中小企業の経営者ですから、会社の話しと共に、中小企業の大変さ、今の経済状況などもよく説明してくれました。本を読んでは話してくれるので、本を読まなくても内容がわかるほどでした。父は勉強のこと、進路のこと、いつも相談できる頼り甲斐のある人です。父が、学校だけで学べない知識を与え、政治経済情勢に興味を持たせ、歴史から学ぶことを教え、私の興味を広げてくれたのだと思います。また、私が紛争解決の仕事に興味を持ったのもやはり、父の話してくれる世界情勢の話聞き、問題意識が高まったからに違いありません。一緒に晩ご飯を食べては、昔からつきることのない話題を提供し続けていた父からの影響は、自分が思っているよりも大きいのかもしれません。

◇母から学んだこと

私の母は、渋谷雅英さんとの出会いがきっかけで、MRAを知り、またUp With Peopleの第一期生としてアメリカをはじめ世界中の様々な都市を回った経験を持っています。その後、父と結婚し、夫と私達子供の為にすべてを捧げた母親となりました。母がMRAで学んだ生き方はどんな時もベースにあり、様々な人に助けをもらい、支えられて生きてきた経験をいつも感謝し青春に悔い無しといつも言っていました。小さくてかわいらしい私の母は、見かけとは違いとてもバイタリティーのある、前向きな女性です。そんな母は、私が小さい頃、一緒にお風呂に入ると決まって、「こんなにいっぱいのお湯につかってゆっくりできるなんてなんて贅沢なんだろう、なんて幸せなんだろう」と。「世界にはお水がなくて困っている人がいっぱいいるのに、明子は幸せね」、「お母さんもお父さんもいて、好きなことが出来て、何不自由無く生活して、世界には同じようにできない人がほとんどなのに、あなたはなんて恵まれているんでしょう」といつも口癖のように言っていたのを思い出します。今も、私にとってお風呂は最も幸せを感じ、恵まれていることを感謝できる場所です。一日、嫌なこと、辛いことがあってもお風呂に入ると感謝の気持ちを取り戻し、またやる気を起こさせてくれる場所です。また母は、ご飯の時は、「世界にはおなかをすかして泣いている人が沢山いるのに、明子はこんなにもたくさん、おいしいものが食べられて幸せね、もったいなくて何も残せないわね」と言われてきたものだから、好き嫌いは小さい頃から全くありません。母のこれらの言葉は、私に、感謝することを自然に教えてくれました。もう一つよくいっていたのは、「あなたは、こんなに幸せで、

恵まれているんだから、それを誰かにわけてあげないとばちがあたるわ、自分だけの為だけに生きるなんてしないでちょうだい。あなたには、あなたにしかないミッション、使命があるんですから、それを全うしてね」と。これは、誕生日や、新学期が始まる時など、なにかの節目にいつも言っていたような気がします。自分に与えられたミッションを捜し、自分の幸せを誰かのために使う、これは、わたしのすべての行動の中心にある原動力です。また私が小さい頃から良く聞いていた言葉があります。それは「正直・純潔・無私・愛、これがお母さんのモットーなのだ」と。小さい頃は良く分りませんでした。それぞれの深い意味を神学の勉強を通してかみ締めたことがあります。母は、これらの信念を若い頃、MRAで学んできたと思います。これは本当に大きな影響を私に与えてくれています。私が神学部に行くと言った時も、「フランク・ブックマン(次ページ 註1)は神学部だったから、まず、人間の根本を学ぶのは大切！ととてもいいわ」と応援してくれました。

◇先ずできることから

この両親がいたからこそ、私が、何事もありがたいと感じ、そこから自然とわいてくる何か人のために、できることからしなくては！との衝動が常にあるのです。と、言っても、何か人のためにといっても何ができるかわかりませんでしたので、とりあえず、違う言葉、違う文化、多くのことに戸惑い、苦勞したという自らの留学の経験から、また、アメリカでのラテンアメリカの人々の集まる教会にたびたび遊びに行っていた経験と、病院訪問のボランティアの経験で、多くの方がアメリカにやってきては、言葉、文化の違いで大変な思いをしていることを知りましたので、日本にいる外国人の人の気持ちは少し分かるのではないかと思い、お手伝いをしようと思いました。知り合いの神父様に紹介していただき、一人でフィリピン人の人が毎週200人以上も集まる教会を訪ね、友達をつくり、彼らのニーズをきき、私の出来ることということで、今、毎週日曜日に日本語を教えるボランティアをしています。彼らの悩みも聞きながら、彼らのお役に少しでも立てばと思っています。でも、何か与えようと思っても、学ぶことが多いのが現実で、彼らの愛情表現豊かな文化の中、私を受け入れ、慕ってくれるフィリピン人の友人ができたことをただただうれしく思います。

◇母から伝えられた感謝の気持ち

長女の私は、両親の期待を一身に受け、守られ、大切に育てられました。期待は、全く重荷とはならず逆に期待されればされるほど頑張れた、豚もおだてれば木に登るといったところでしょうか、すすすくのびのびと生きてきました。すーっと今まできた私は、すべてが「ありがたい」としか言

えません。恵まれているなど感謝せざるをえません。こんなに恵み豊かに生きてこられた、与えられて生きてこられた私が何もせずただ自分のためだけに生きていくのは、本当に世の中にすまないと言う気持ちがあり、こんなに多くのすばらしいものを与えられたのにシェアしないのは、もったいない、もしくは何もしなければばちがあたるとでもいいでしょうか、ありがたさからくる衝動が満ちています。自然にわいてくるこの気持ちは、今振り返ってわかるように、母から伝えられたものだと思います。

◇持っている力を他の人のために

感謝の言葉を発することができるのも、またありがたい事なのだと、最近感じています。世の中を見渡せば、虐待が相次ぎ、望んで生まれてこなかった子が愛を知らず、見捨てられている現実をみると、彼らはなかなかありがたいといえないと思います。彼らにとって親は自分をひどい目に合わせた存在でしかなく、辛い暗い人生を背負わせた源なのかもしれません。彼らにも、命があたえられ、大きくなってきたのですから彼らにもそれぞれユニークなミッションがあると思います。ひどい目にあった彼らにそれでもありがたいと言え！と言っているわけではありません。私がここで言いたいのは、ありがたい、感謝できる環境に生まれ、育ってきたにもかかわらず、自分のことばかり考え、それでいて不幸だといっている人に言いたいと思います。私の周りには、両親に可愛がられ、良い大学に進学し、大企業で働き、お金もステイタスも持ってあり、何不自由なく過ごしている人が大勢います。もちろん、悩みや苦しみは当然だれにでもあるわけですが、感謝できる環境にいる人が、もっと意識を高く持って、自分から変わり、自分の幸せを他の人に分かち合わないとバランスが崩れると思います。私は常々、世の中には力の動きがあつて、既に自分の持っている力全てを自分のほうに向けると耐えきれなくなり、逆にストレスになってしまう。そうではなく、持っている力を他の人のために、外に、外に向けることで自分も幸せになり、他の人も幸せになるのではないかと考えています。つまり、与えられたものは、自分にとどめておくのではなく、他の人に分かち合わなければならないと思うのです。ペイフォーワードという映画がありますが、簡単にいうとペイフォーワード、いいことをしてもらったら、そうしてくれた人にただ返すのではなく、違う人にいいことをしパスして行くということです。私の母は、まさにこのことを実行していると思います。母は、ここにも大勢いらっしゃいますが、昔から仲良くしてくれた、お世話になった、助けてくれた人々が大勢いることをとても感謝しています。実際、今は、京都に住んでいますので、直接具体的な形でお世話になった人にお礼をしたとは思いません。しかし、母は確実にその感謝を次の人にパスしていると思います。私の友達をはじめ、多くの外国の人の

ホームステイを受け入れてきました。陶芸教室では、人々のつながりを大切に、沢山パーティーを開き、多くの人の相談に乗っています。もちろん、母は義務感でやっているわけではありません。楽しんでやっています。でも感謝の気持ちが自然とそうさせているということ、自分から変わり、自分のできることから何かを始めていくというMRAのモットーからきているのだと思います。

◇平和を分かち合いたい

親から学んだことは多すぎて数え切れません。また、何不自由なく生きてこれた幸せな家庭に生まれ、愛情を注いでくれた両親に感謝でいっぱいです。でも、やはり一番私の人生に大きな影響を与えているのは、感謝の気持ちから自然と生まれる、人の為になりたいと思う気持ちと、母親の日々の生活態度、また彼女の学んできた思想が伝わったということです。母がMRAを実践してきたからこそ、私はこのような思想を受け継いだのだと思っています。私の中のキーワード；平和とは、フランク・ブックマンがいったように、心の中から始まると思っています。紛争解決の為の仕事はまだまだ時間がかかりそうですが、少なくとも心の中の平和を自分自身が保ち、人々にもその平和を分かち合えることが出来たらと思います。

ほりば・あきこ 1977年生まれ。上智大学神学部にて在学中に2年間にわたりイタリア・ローマの教皇庁立グレゴリアン大学に留学。2001年に上智大学を卒業後、アメリカのウエストン・ジェスイット・スクールに留学し神学の修士号を取得する。現在、(財)日本国際交流センターでインターンとして働く。本年4月よりは、上智大学の博士コースに進学。

(註1) フランク・ブックマン博士

1878年アメリカ・ペンシルバニア州生まれ。ミューレンバーグ大学で神学を修める。第二次世界大戦に突入する前年の1938(昭和13)年、軍備の増強に狂奔する欧州各国の醜い姿をつぶさに見て、軍備に代わる道義と精神の再武装(Moral and Spiritual Re-Armament) が世界の平和と繁栄への道であり、それは世界大のスケールで進めなければならないという確信を得て、MRA(道徳再武装)運動(現ICイニシアティブス・オブ・チェンジ)を全世界に向けて提唱した。戦後は、いち早く独仏の和解、日本の国際社会への復帰の手助け等々世界に平和と融和をもたらすための活動に着手すると共に、人種・宗教・民族等の違いを超えて、新しい世界を築こうと共に働く人々の世界的なネットワークを築き上げた。日本政府は1956(昭和31)年、彼の功績に対し勲二等旭日章を贈った。又、フィリピン、タイ、ビルマ、イラン、ギリシャ、ドイツ、フランス等もそれぞれ勲章を贈って、博士の国際関係の改善等への功を讃えた。1961(昭和36)ドイツのフロイデンシュタットにて83年にわたるその生涯を閉じた。

前記の講演を聴かれた岡本あんなさんから感想を寄せて頂きましたのでご紹介致します。

外国では水が十分でない所が多いことを堀場明子さんに聞いたので、水をせつ約しようと思いました。日本はとても恵まれているけれど、なぜゴミゴミしているのかな。私が通う八雲小学校ではウズベキスタンへ送る文房具などを五年生が集めています。私にはお気に入りの文房具があるのでとてもありがたいな、と思います。

戦争中に生まれた高橋久子さん。私もアフガン戦争やイラク戦争などを考えると心が暗くなります。四人の子供を持つ高橋さんは、どんなに小さな子供でも一人の人間として、みんな平等に見ることが大事だと話しました。とてもいい話

だと思います。小さな子供と大きな子供のけんかが起こらないように平等にしたいと思います。誰が正しいかではなくて、何が正しいかということはこの世界でも大切だと思いました。

「自分は神様を信じなくても、神様が信じてくれる」話を相馬雪香さんに聞いて、神様が信じてくれるなら神様を信じようと思いました。自分が何をすればいいのか、まず考えて、それから行動する。相手のことをどうこう言わないで、自分のことをやってから相手に伝える。その順序でやっていくのがいいのかな、と思いました。

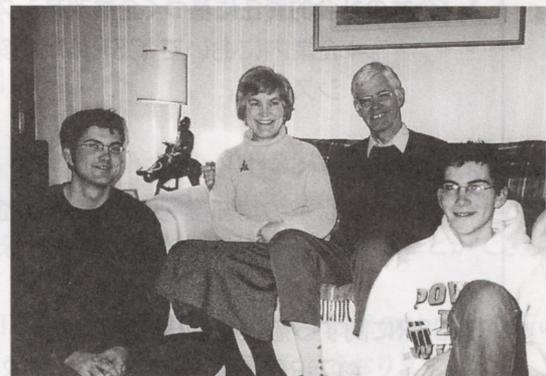
岡本 あんな(目黒区立八雲小学校3年生)

日本で学んだこと

フィリップ・クレイグ
(シェフィールド大学学生)

1982年4月から4年半、ICの専従をしていたジェフリー・クレイグ夫妻と共に日本に滞在し、当時、日本の幼稚園にも通っていた、フィリップ・クレイグ氏より、昨年日本に来て学ばれたという点につき寄稿頂きましたのでご紹介致します。(原文英語)

私はイギリスのシェフィールド大学で日本について勉強しています。2002年の10月から11ヶ月間交換学生として名古屋大学で学びました。文学部の一員として日本の現代社会、歴史等のコースを受講しました。しかし、もっとも価値のあるレッスンは、教室の外で学んだものでした。例えば、来日当初一つのチャレンジと感じたのは、宿舎でのプライバシーの欠如です。もし部屋の鍵が閉まっていなければ、日本の友人たちは出入り自由と解釈して、私の部屋にしばしば入って来たものです。最初の頃には、落ち着かない気がしたのですが、時間が経つにつれ、それが大切なことと感じるようになりました。そのようなことがあったからこそ、私の階の住人たちの共同体意識と友情が強化されたのです。これをぶしつけな行動と見るのではなく、日本の生活の良い要素のひとつとして見なせるようになった時、このような違いを感謝し始めたのです。近代、及び、明治以前の歴史の色々な見方についても学びました。イギリスの新聞で日本の歴史的な問題を目にするのがしばしばあります。日本で最も貴重な体験の一つだったのは、ある会合で、首相の靖国参拝問題について質問を投げかけることができ、また、日本の歴史的な問題について日本の方々の考え方を伺えたことです。そのことにより、イギリスの歴史について考えさせられました。例えば、毎年11月11日には、先の二回の世界大戦で亡くなった方々を偲ぶ式典があります。これらの式典が8月の靖国神社での行事と違うのか、同様のものなのか？日本でこ



●クレイグ一家(左端がフィリップさん)

れらの問題を考えたため、世界大戦に対する自国、イギリスの態度というものに対しても考えるようになったのです。どの程度まで、我々の「社会の記憶」を歴史として飾ることにやましさを感じるのでしょうか？あらゆる文化は、その歴史を当事者の記憶を含めた入手可能な証拠という光に照らして検証する必要があります。その際には、相反する証拠や同意をしないという人々にも考慮を払わねばなりません。これこそ歴史を学ぶ上で最も困難な面であり、これから更に勉強して行くに当たり、日本で学べた教訓を感謝をもって活かしていきたいと思えます。

慣れ親しんだシェフィールドに戻り友人達と再会で嬉しく思います。しかし、近い将来日本に戻るつもりです。日本は、多くの面でイギリスと随分異なりますが、これらの違いを理解し感謝することは、日本人、イギリス人双方が、地球村に住むということがどういうことを意味するのかを理解する上で、とても役立つと思えます。日本で、日本語をもっと上達させられたあかつきには、日本の方々の経験から学ぶだけでなく、英国人の視点と言うものを知って頂くことでお役に立てるのではないかと考えています。

▼▼CRT日本委員会ニュース▲▲

経済人コー円卓会議 (CRT) 日本委員会の取り組みについて

今、日本企業は、“企業の社会的責任 (CSR)”を具体的に実践していくことを市場から求められ、これが大変大きな課題となりつつあります。2004年はCSR関係者にとってみれば、とても重要な年になることは間違いのないことと言えます。つまり、企業は持続的成長をする上での真価と新しい企業価値を、CSRの遂行を通してステークホルダーから問われるものと思われまます。

このような状況を踏まえ、今年CRT日本委員会がどのような活動を行うのか、皆様にお知らせすると共に、できる限りCSRに携わっている方々をサポートするために邁進していきたく思っております。

CRT日本委員会においては、今年は、以下の3重点項目に絞って活動を進めていきたく思っております。また、この計画を成功に終わらせるためにも、多くの関係団体と協力しながら、日本の企業社会が大きく変革することができる新しいビジネスモデルを構築し、新しい企業価値を導いていくことがCRT日本委員会に課せられた責務ではないかと思っております。

1. 『企業の社会的責任に基づく企業改革システム (CSRイノベーションシステム)』の本格的導入
⇒企業内において“CSR体制構築”やリスクマネジメント等をサポートするシステム。
2. CSRキャンペーン
⇒CSRの認知度を高めるため、企業社会でなく、市民社会レベルまで視野に入れた啓発活動を行う。
3. CSRに関する勉強会 & 研究会の発足
⇒CSR関係者を主体にしてCSRに関する情報の共有化を図る。

1. 『CSRイノベーションシステム』の本格的導入について

「CSRイノベーションシステム」に関しては、昨年11月の記者発表に続き、今年3月9日には日経産業新聞に当システムに関する記事が大きく掲載され、その後様々な企業や団体が関心を示し、問い合わせがCRT日本委員会に寄せられております。

(1) CSRイノベーション・プロジェクトチームの組成

CRT日本委員会では、これまで準備に当たってきたメンバーを中心に新たに“CSRイノベーション・プロジェクトチーム”を創設し、本格的に導入を検討している企業へのサポート業務を開始しております。

(2) 『経営者向けシステム』のセミナー開催

CRT日本委員会では、日本能率協会と共同で企業向けに『CSRイノベーションシステム』に関するセミナープログラムを開発中です。このセミナーを通して、より多くの企業にCSRの活動への関心を示して頂き、各企業におけるCSR体制構築を具体的に支援するためのプログラムを開発していきたく考えております。

2. CRT-CSR普及広報活動

このCSR広報活動に関しては、“CSR”というものが企業だけが真剣に取り組むのではなく、日本の市民社会にも“CSR”が浸透していくような社会基盤を整備していくことが大切であるとCRT日本委員会では考えております。現段階においては、主に2つの企画を計画しており、今後も日本国内の状況に対応して、適宜CSRの浸透及び普及活動を展開していきたいと思っております。

(1) CSRの国際的動向について(4月13日から18日)

欧米のCSRの近況を知るために、米国からグローバルCRT会長のジョージ・ボイタ(George Vojta)氏、そして、オランダからロイヤルダッチシェル国際部門役員のヒュー・ミッチェル(Hugh S Mitchell)氏を招聘し、講演会、シンポジウムを開催し、“CSR”というものを様々な人々(企業人、ビジネスマンをはじめ、公認会計士、弁護士、学生、主婦等)に関心を持っていただけるようにしていきたいと思っております。尚、詳細な日程については、確定次第、後日CRTニュースやCRT日本委員会のホームページ (<http://www.crt-japan.jp/>) を通して、ご案内させていただきます。

(2) 2004年第19回CRT国際会議(10月22日～24日)

“「利益」と「企業の社会的責任」の両立へ”

第19回CRT(Caux Round Table)国際会議が日本において開催されます。10月22日(金)～24日(日)の日程で、富士山麓の経団連ゲストハウスにおいて行われます。これからの企業の課題は、CSRと利益が両立できるのかどうか、また企業戦略にCSRの考えをどう盛り込み、ステークホルダーまでを重視した経営を実践することができるのか、といったことではないかと思われまます。

当国際会議では、海外からも様々なビジネスリーダーが来日し、今後の日米欧における「企業の社会的責任のあり方」、日本経済の動向などについて日本のビジネスリーダーとディスカッションをする予定でおります。

3. CSRに関する勉強会 & 研究会の発足

2004年6月より、CRT日本委員会の法人会員のCSRを担当されている方々を中心に、CSRに関して日頃どのように考えられ、実践しようとされているのか、意見交換会を行う予定でおります。この意見交換を参考にして、ステークホルダーを含めたCSRに関する勉強会や研究会(CRT日本委員会法人会員限定)を発足させ、日本におけるCSRのあり方を考えていきたいと思っております。

また、必要に応じて、CRTのネットワークを通して海外からCSRに関係されているゲストを招聘し、関係者の方々により認識を深めて頂けるような企画も考えております。

CRT日本委員会事務局長 石田 寛

◇第一回IC韓日大学生フォーラムレポート◇

『東北アジアの平和と繁栄のための
韓日大学生の役割と課題』

日韓共同未来プロジェクトの一環として韓国政府の支援を受け、韓国MRA協会の主催で去る12月19日から24日まで行われた、韓国での第一回韓日大学生フォーラム『東北アジアの平和と繁栄のための韓日大学生の役割と課題』に日本から13名の学生が参加しました。ほぼ同数の韓国の大学生たちと率直な意見交換を図ったのち、今後の具体的な活動の進め方についても共同宣言(P.13~14に掲載)をまとめました。又、会議の合間には、独立記念館等を訪問して過去の歴史を学んだり、ホームステイ等を通して韓国の人々の生活や文化にも直接触れる機会も得ました。ここに日本からの参加者の感想も含めてご報告します。

小出 壮一 慶応大学4年生 (ICユース)

私は今回の訪韓にあたり、一つの目標を立てました。それは「よく聴く」ということです。

出発前の12月のIC定例会でも申し上げましたが、今回の日韓共同プロジェクトの準備段階から、私自身がそれまであまり意識することのなかった韓国の存在を、ふとしたきっかけで大学にいる韓国人留学生と友達になったり、突然目に止まったいつもの通学路の韓国料理店に入ったり、さまざまな場面でさまざまな形で感じるようになりました。自分に興味関心があればそれまで気がつかなかったことに気付くことができ、あまり考えてこなかった物事についても深く考えることができ、自分自身の中から聞こえてくる言葉に耳を傾けることができるのだと思うようになりました。逆にいうと、人間の目や耳というものは、自分に関心がなかったならば、聞こえていても聴いておらず、見えていても視ていないものなのだということです。

私は今回の訪韓に先駆けて今年の夏にも韓国へ行き、韓国の雰囲気といいますか、空気といいますか、そういったものをとりあえず肌で感じてきました。ですから正直に申し上げますと、帰国してからしばらくの間、自分は韓国を知っているという驕りが自分の中にありました。ですが、事前準備のためにさまざまな方々からさまざまなお話を伺い、自分自身でも先に述べたようなことに気付くにつけ、これではだめだと思ったのです。一度見たからいい、一度聞いたからいい、というのではなくて、以前に見聞きしたときと次のときとは、少なからず受ける印象も違うはず。その違いに気付くことができれば、自分自身にとっても今回の訪韓の意義をよりいっそう高めることができるのではないかと考えました。

韓国滞在中は、多くの同世代の若者と趣味の話や好きなミュージシャンの話をして楽しく交流したり、会議では自分たちが自分たちの問題として日韓関係をどのように捉えればよいのか、またそれに対してどのように貢献していけばよいのかということと、とことん話し合うことができました。非常に有意義な五泊六日でした。会議の中では、韓国における日本文化開放政策のメリットとデメリットについて、日本の開放的な性文化が韓国社会に入ることは望ましくないという意見と、政府が情報を統制することに対する疑問が入り乱れるような場面もありましたが、そういうときにこそ冷静に先入観を排して相手の話をじっくり聴くことで乗り越えることができたと思います。歴史認識の問題などでは、自分が先入観として「全ての韓国人は歴史認識の問題に関して日本人を憎んでいる」といった間違った考えを相手に押し付けていたことに気付き、自分がものごとを単純化しすぎていたことを反省させられる場面もありました。

今回の訪韓の成果としては共同宣言を採択したことが一番大きなことですが、それ以外の点を含めても、今後の日韓共同プロジェクトの方向性を定める上で非常に重要な訪韓になったと思います。また個人的にも多くの友達を韓国に作ることができましたし、さまざまな面で僕自身が成長する機会を与えてくれました。本当にありがとうございました。来年以降、日韓共同プロジェクトは日韓のためのみならず東アジアの平和と繁栄のために、具体的にはいまだ宗教に根ざした対立感情が根強く残るインドネシアと、急速に経済成長を遂げつつさまざまな問題を抱えている中国で、活動を展開していく予定です。今後も僕らICユースの努力に、多くの人からのご理解とご協力をいただきたいと思っています。よろしくお願ひします。

金窪 花野 聖心女子大学4年生 (ICユース)

「無関心な勢力に、どうやって関心を向かせるか」ということこそ、日韓関係改善の必要性に気付いているICの役割ではないか。そんな意見が訪韓前の会議で出ました。裏方として韓国の大学生と韓国語で連絡を取っていた私は、今回初めて訪韓するメンバーのことを気に掛けていました。韓国の中学生を迎えて行われた夏のキャンプで、「韓国」に初めて触れることになった日本の中学・高校・大学生は、言ってみれば「無関心な勢力」でした。しかし覚え立ての韓国語で、中学生を村の仲間に入れようと皆頑張ってくれていました。その大学生の中から、今回4名のメンバーと一緒に訪韓しました。彼女たちが歴史問題などを扱うICの事前勉強会に参加しにくいだらう事も分かっていましたが、歴史問題などの難しい話も知った上で訪韓する方が良いとも思っていました。しかし、一番大事なことは、生の韓国に触れることによって、韓国の良さを知り、好きになってもらうことだと私は考えていました。それは本や噂ではなく、本物の韓国に触れることが、一番重要で必要だと考えるからです。

今回の参加者は、日韓共に若い世代が多かったです。特に韓国の大学生は、大学生らしくフレンドリーで、非常に良かったです。独立記念館での日帝による強制徴兵の模型を見ながら、「俺らも徴兵されたよな(韓国の軍隊制度)」と笑い合う姿や、蠟人形に「笑える」と言ってしまう姿、「日本のゲームは面白い」と語り出す姿。新世代、過去にとらわれすぎない若い世代が韓国にも生息し始めていることを実感させてもらいました。

吉木 愛実 聖心女子大学4年生 (ICユース)

長いようで、短かった6日間も幕が閉じてしまいました。日程表を見ると、講義が4時間、討論の時間は10時間に及びました。また、夜半、個人個人が話し込んだ時間を考えるととても長い時間互いに交流を深められたと思います。最初に日程表を見たときに、「遊ぶ時間がない」と思った人も両国ともに数名はいたと思います。けれども、互いに長時間、互いに話をする事で、ただ観光をするよりも様々な相互理解を得ることが出来たのではないのでしょうか。正直なところ、日本での準備期間中、私は期待と同じくらい大きな不安も抱いていました。何故なら、昨年度、私個人は韓国に留学しており、その際に多くの友人たちと出会い、また歴史問題や韓日問題に対して率直な対話を多く交わしてきたためです。しかしながら、準備期間中に送られてきた韓国からのメールや韓国の皆さんと実際に話していくうちに過去の問題について拘っている自分に気付くことが出来ました。今回のフォーラムでは、過去から学ばなければならな



未来志向な会議だったことも手伝って、初訪韓の若い4人は、韓国に大事な友人を作ったようです。辞書まで買ってハングルで手紙を書いたり、チャットで毎晩話したり、実際に訪韓・訪日の計画を立て合ったり…。訪韓したメンバーの誰もが今回の短い日程の間に、多くの友情を成立させたようです。その小さな交流が今後も無数の網の目上に広がっていくのであろう事を想像するだけで、私は本当に嬉しいです。1月1日に日本文化が韓国でほぼ開放されました。日韓の映画や歌手間でも、今後大きな交流の動きが見られるようです。「韓国」や「日本」に関する接点が増えることで、日韓交流推進のためのタネが増え続けていでしょう。小さな交流から、大きな流れを作ればいいのです。友情が成立してからでも、難しいことは勉強していけばいいのです。関心のある私たちが、口では言えない韓国の良さを多くの「無関心勢力」に広められますように。高校時代に一人の韓国の友人と出会ったために韓国にはまってしまった私ですが、その後に続く後輩がいることを確認できて、安心して社会人になれます。

いことは多いけれども、それ以上に未来をともに歩むためのビジョンを共に作り、共に方向を決めていくことが出来たと思います。これは韓国の皆さんの協力がなければ、叶わないことだったとも思います。

今回の会議はこれで幕を閉じますが、「一つの終わりは、一つの始まりを招く」という言葉のとおり、10年、20年後の私達と同じように集い、手を取り合って、さらなる未来へと進んでいくことを信じています。

実は一昨年(会議当時)、雲も無く良く澄んだ夜空に美しい流れ星を見ることが出来ました。流れ星に願い事をすると言うという言い伝えがあります。流れ星がすぐに夜空に吸い込まれていくように、私達の今回の会議も長い「歴史」という一つの大きな流れの中にすぐ吸い込まれていくことでしょう。しかしながら、昔から人々が流れ星に願いをかけてきたように、私達もこの会議に願いをかけ、韓日青少年の未来へ向かう大きな第一歩であることを自覚しつつ、今後も歩みを止めることなく、私達が望む未来へと歩んでいきたいと思っています。

平野 理美 日本大学2年生
(東京少年少女センター)

このプロジェクトに参加した理由は8月に行われたサマーキャンプに参加した韓国の中学生に会えるというのがあったからでした。だから、実はあまり日韓の歴史の問題などには興味がなく、ICの事前の勉強会へも参加していませんでした。「なんでこんなに会議ばかりなのだろう、もっと自由に好きな場所に行ける観光をしたいのに…」なんて思っていました。これが私の最初の気持ちです。

韓国に着いて、先生方からのいくつかの講義や大学生同士での討論を通して私が気付いたこと、それはこのプロジェクトの意図を大きく捉え違えていたことです。何度も当たり前のように話される言葉の内容を十分知らなかったり、興味さえ持ってこなかった自分に劣等感を感じ出していました。日韓のバックグラウンドを知らないのに討論に参加し、自分の意見を言っているものなのか考えてしまいました。そう感じたのはこのプロジェクトが日韓の関係を悪くした過去の清算が目的である、と思っていたからです。そこで私は思い切ってこの思いをみんなにぶつけてみました。すると「まず第一に人と人が触れ合うことが大切。こうして仲良くて、だんだん歴史のことを知っていけばいい。そして分からなければ気軽にお互い聞きあえばいい」と言ってくれました。同世代としてまず今仲良くすることを優先させてもいいという同じ視点をもっていたことを知ることができました。「ただ未来を切り開いていく上で同じ過ちを繰り返さないためにも、過去を知ることは必要だ」とも言っていました。そこでこのプロジェクトの目的を捉え違えていることに気付きました。それからは余計な思いにとらわれずに素直に自分の意見を言えるようになった気がします。



●熱心な討論を重ねた日韓の参加者たち

韓国の大学生と1対1で話していると、韓国人と日本人の代表の交流ではなく、日韓の文化の違いを通して個々人の交流で仲良くなっていると感じました。その交流の中で、ホームステイ中にやりたい事の希望を細かく聞いてくれたり、本当に小さいことにも気を使ってくれたり韓国のみなさんには本当に感謝しています。異文化交流をしていく上で相手を受け入れる温かさは本当に大切だと感じました。

このプロジェクトを通して得た経験は観光で訪れただけでは得られないものです。観光ではこんなに韓国の生活を知ることはなかったし、日本に対しての思いなども知ることはできなかったでしょう。なによりこんなに仲良くなり友達を得ることなどできなかったと思います。それぞれの国で異なった教育を受けた同士が、一緒に同じものを見聞きして考えることは、歴史観の違いを埋めるにはとてもいい方法だと思いました。

これからの未来に対してやれるまず第一歩は、この体験を日本に帰ってできるだけ多くの人に伝えていくことだと思います。



●サムルノリ(伝統音楽)に挑戦



●ナヌムの家(元従軍慰安婦の方たちのためのハウス)を訪問

◇◇ 韓日大学生共同声明文 ◇◇

2003年12月19日～22日まで、韓国と日本の青少年(大学生)が集まり、第一回韓・日共同未来FORUMを開催した。和解と協力というIC(MRA)の理念に基づいて21世紀の韓・日関係の主役である韓・日両国の青少年(大学生)の交流を活性化することを目的としている。このフォーラムを通じて、21世紀における青少年による新たなパートナーシップを構築し、さらにアジア地域の平和と発展に貢献する方法を模索した。

・DISCUSSION

韓・日の青少年(大学生)は20日から21日まで2チームに分かれてディスカッションを実施した。最終的に共同で意見のとりまとめ作業を行った。

・SUBJECT1 “韓日の文化と歴史の正しい理解”

韓・日の青少年(大学生)は文化と歴史に関する幅広い分野で様々な視点から議論を行い、相互理解を深めた。

・両国のイメージについて

- 韓国の青少年(大学生)からは日本のイメージとして、「本音と建前」、「開放的な性文化」、「アニメーション」とゲーム、「天皇尊重」などが提示された。
- 日本の青少年(大学生)からは韓国のイメージとして、「韓国語の語気の強さ」、「キムチ」、「文化的親近感」、「小中華思想」、「上下関係」などが提示された。

・SUBJECT2 “21世紀における韓日青少年の役割と協力の方法”

韓・日の青少年(大学生)は、相互の信頼を構築するために文化や歴史に対する認識の違いをうめることが重要であるとの共通認識が得られた。そして、韓・日の青少年(大学生)は、21世紀の韓・日関係を相互の信頼に基づいた協力関係に発展させるためには、若い世代が草の根の交流を持続することが重要であること。そのため、韓・日青少年(大学生)FORUMの定期的開催に向けた努力をする決意を表明した。また、今回のFORUMを通して生まれた韓・日青少年(大学生)の友情をFORUM終了後も大切に、発展させる。

・ロールプレイングゲーム(ROLE PLAYING GAME)

韓・日の青少年(大学生)が、食事文化、大学入試、恋愛、サッカー韓・日戦に対する両国民の一般行動を演劇で表現。ロールプレイングゲームを通して認識の違いを縮めることができた。

・アクション・プラン(ACTION PLAN)

1. 韓・日青少年(大学生)FORUMの定例化

定例化を通して、持続的な韓・日青少年(大学生)の交流を実施する。

持続的な交流を通して発展的な韓・日関係の未来像を提示する

年2回(8月/12月)、定期的に韓・日青少年(大学生)FORUMを計画し、実施する。

2. ウェブサイト(HOME PAGE)

・地理的問題による文化交流の問題を解決する為のソリューションとして、恒常的な韓・日交流の活性化のため、ウェブサイトを構築する。

・韓・日両国の社会的、文化的問題に対する認識を共有する。

・両国間の歴史を理解できる旅行ルートをお互いに紹介する。

・韓・日両国の図書を読み、図書感想文を交換しながらお互いを理解する。

・詳細計画作成後、ウェブサイトを構築実施予定。

・韓国側担当者:韓秉敏(ハン・ピョンミン)、日本側担当者:園田誠一郎

3. インドネシア

- ・韓・日両国の青少年(大学生)が対話を通して改善された友好的関係を基盤として、インドネシアにおける紛争解決の方法の糸口を探る。
- ・韓・日両国の青少年(大学生)が東アジアにおける国際協力の一形態として、第三国の青少年(大学生)の客観的視点から新しく考慮する。
- ・インドネシアの宗教紛争、貧富格差、経済的危機等について討論し、インドネシア社会における青少年の役割と行動方法を検討する。
- ・韓国側メンバーの意見を反映しながら、日本側メンバーが引き続き主導的に計画作成および修正にあたり、両国の青少年(大学生)が協力してプロジェクトを推進していく。

4. 韓・日・中

- ・東アジアの平和と繁栄のために韓・日・中文化の理解と青少年(大学生)ネットワークを構築する。
- ・各国文化の理解を通じて、各人の認識の違いを縮めていく。
- ・フォーラムを通じて、韓・日・中青少年(大学生)のネットワークを構築する。
- ・地域共同体の形成と発展のために、21世紀における韓・日・中ビジョンを提示する。
- ・日本側メンバーの意見を反映しながら、韓国側メンバーが引き続き主導的に計画作成および修正にあたり両国青少年(大学生)が協力してプロジェクトを推進していく。

2003年12月23日

韓国参加者代表：申 光鎬
日本参加者代表：益戸 平

【スケジュール】

12月19日(金)

- 9:30 成田国際空港出発
- 12:00 インチョン空港到着、韓国大学生の出迎えを受け、バスで国際青少年センターへ
- 15:30 サマーキャンプに参加した韓国中学生と再会
- 17:00 開会式及び歓迎晩餐会
- 19:00 講師：リー・ソングン博士
(ハンソン[漢城]大学元総長、韓国MRA(IC)協会理事)
- 21:00 参加者のためのオリエンテーション

12月20日(土)

- 9:30 ナヌムの家(元従軍慰安婦の方たちのためのハウス)訪問
- 11:30 ヨギン出発、国立中央青少年修練院到着
- 14:00 『第1回韓日大学生フォーラム』テーマ『21世紀における韓日大学生の協力の方法』
開会式(祝辞、激励の辞)
発表者：韓国大学生代表 キム・ジヨン
日本大学生代表 小出 壮一
- 15:30 分科会(1)テーマ：韓日の文化と歴史の正しい理解
2つのグループで、国のイメージなどについて話し合う
- 19:00 文化の理解のために、サムルノリ(伝統音楽)を体験学習
- 20:30 目の不自由な子ども達による、伝統音楽や舞踊を見学
- 21:30 両国の学生が、自国の教育(受験)、文化(飲食の支払いの習慣)、恋愛についての短い劇を披露しあい、その後、それらについて話し合う。

12月21日(日)

- 9:00 講義 テーマ：21世紀を担う韓日の青年に期待するもの
講師：橋本 徹(国際IC日本協会会長)
- 9:40 分科会(2)テーマ：21世紀における韓日大学生の役割と協力の方法
前日の討論での内容を踏まえて、現在と将来の関係について話し合う
- 13:00 独立記念館見学
- 15:30 再び2グループに分かれて、話し合う
- 18:30 韓日文化交流(両国の大学生による発表)
韓国の学生は、軍隊での生活を劇で紹介。日本の学生は、詩吟、日本の歌、茶道を披露
- 21:30 AとBグループで話し合った内容を発表し、韓日大学生共同声明草案を作成

12月22日(月)

- 8:30 国立中央青少年修練院出発、統一展望台に到着
- 11:30 統一展望台見学
- 14:30 景福宮を見学
- 16:00 ホームステイ先の家族との対面(各ホームステイ先に宿泊)

12月23日(火)

- 9:00 ホームステイ先の家族と共にソウル見学
- 17:00 閉会式及び送別晩餐会、韓日大学生共同声明文の採択

12月24日(水)

- 8:30 国際青少年センター出発、帰国

《IC国際会議のお知らせ》

■第27回IC小田原国際会議

《テーマ》

『新しい家庭、新しい社会、新しい国、新しい世界—社会の核としての家庭の在り方を考える—』

日時： 2004年6月11日(金)～6月13日(日)

会場： アジアセンターODAWARA

神奈川県小田原市城山4-14-1 TEL:0465-22-6131

和解と融和のメッセージを伝えていく次代のIC/MRAを担う青年たちを育てるべく、インドを皮切りにアジア各国で約10ヶ月間にわたる訓練を行う研修プログラムである『アクション・フォー・ライフ (AFL)』の第2回目の参加メンバーの中からイギリス、オーストラリア、韓国等からの青年たち、並びに、引率者を含め、各国からの参加者が多数参加されますので、どうぞ奮ってご参加下さい。会議の詳細については、IC事務局にお問い合わせ下さい。

尚、『アクション・フォー・ライフ (AFL)』のメンバー、及び引率者からなるグループは、6月9日(水)に来日し21日(月)の出発まで、各地での学校への訪問や青年たちとの交流等のプログラムに参加する予定です。

■第11回ICアジア・太平洋青年会議(APYC : Asia Pacific Youth Conference)

《テーマ》 『あなたとわたしが築くより良い世界』

日時： 2004年7月22日(木)～31日(土)

会場： カンボジア、シェリムアップ

- 目的： 1.文化の違いや国境を超えた国際的友情を築くことを通して、個々人の世界観を広げる
2.自らの住む地域社会と地球の将来のために果たすべき個々人の役割と責任を探る
3.日々の生活と自らのこれまでの生き方を省みることを通し、より意義のある人生を歩むために自分を変えるべき点を見つけ改めて行く

参加対象者：18才～35才

※会議の詳細については、IC事務局にお問い合わせ下さい。

■第58回コーIC世界大会(スイス)

7月8日(木)～8月19日(木)

総合テーマ『理想と我欲のギャップを縮めるために』

- ・「個人、そしてコミュニティーに奉仕の精神、責任感、リーダーシップを養うために」 7月 8日(木)～14日(水)
- ・「コー産業人会議 グローバリゼーション—ギャップを縮める」 7月16日(金)～21日(水)
- ・芸術会議「現在の在り方を変えて行くために」 7月24日(土)～30日(金)
- ・「良き統治を通じた人間の安全保障」 8月 4日(水)～10日(火)
- ・「平和作りのイニシアティブ」 8月13日(金)～19日(木)

※詳細については、IC事務局にお問い合わせ下さい。尚、いずれの会議も会議開始の6週間前までの参加申込みが原則となっていますので、ご参加ご希望の場合には早めにお手続き下さい。

◆◆◆ICニュース◆◆◆

◇新任理事の就任◇

去る3月13日に開催された第40回IC通常総会におきまして、大竹美喜氏(国際科学振興財団会長)と藤田寿子氏(茶道教授、前IC女性の会[現よつ葉会]代表)の両氏の理事への就任が承認されました(任期平成16年3月13日～平成17年12月31日)。お二人のますますのご活躍が期待されます。

第11回ICアジア・太平洋青年会議(APYC : Asia Pacific Youth Conference)

◇ご支援のお礼とお願い◇

先般、カンボジアで開催されます第11回ICアジア・太平洋青年会議(APYC)のためのご寄付、並びに、炎暑の中、現地での会議の準備に献身的に当っておられる兼松恵さんへの支援金をお願いするお手紙をお送りさせていただきましたが、3月22日現在、APYCのためには、53名の方々より422,612円のご寄付が、又、兼松恵さんへの支援金として13名の方々より111,000円をお寄せ頂きました。皆様の暖かいご支援を心より感謝申し上げます。

皆様のお力添えによりこの会議に参加が可能となるカンボジアの青年たちが、ICの理念を学び、その考え方を実践することを通して、健全な社会そしてカンボジアの国作りのために大いに活躍してくれることと確信しております。又、日本の方々の暖かいお心を、このような形で再び、カンボジアの方々に伝えられることを有り難く思っております。

尚、今回のAPYCには、アジア、そして太平洋の国々を中心とした国々から総勢200名の参加者が見込まれております。10日間にわたる会議の参加費200米ドルを賄うことの困難なアジアの国々の青年たちも多く、各国のIC/MRAのチームが協力して支援のための募金活動を行っております。そこで、日本のICでは、主にカンボジアの青年たちへの参加支援を中心として、70万円の募金を目標額といたしました。この会議がカンボジアをはじめ、アジア、ひいては世界の将来を担って行く青年たちに大きな影響を与えようという意義をご理解賜り、皆様からのさらなるご支援を賜りたくここにお願い申し上げます。

社団法人 国際IC日本協会 名誉会長 相馬 雪香

◇ICよつ葉会の2003年度活動報告◇

ICよつ葉会(元IC女性の会)の2003年度の一番大きな変化は、会の名称が新しくなったことです。よつ葉のクローバーの幸せを呼ぶという意と四つの道義標準を表しているこの新しい名称は、メンバー間でじっくりと討議された結果決まったものです。又、それと同時にICよつ葉会の理念も作成しました。それによって、メンバー一人ひとりが個々の社会での役割を少しずつ見出すことが出来、会の活動範囲も広がりました。月例会の内容は、一人ずつ1時間くらいで人生の転換点をテーマとしてお話いただき、お互いをより深く知る機会を設けました。このストーリーテリングは、5回にわたって行われ、今年度も引き続き行われています。その他、例年IC小田原国際会議でお手伝いしてまいりましたが、昨年度もティー・タイムのお手伝いをはじめ、文化の夕べでのコーラスや、海外からの参加者の支援などをしました。また、秋には恒例のリトリート(一泊二日でいつもの忙しい生活から離れ、メンバーと共に静かな時間を持って時を共にし、リフレッシュする)を開催しました。

4月にはカンボジア農民会議を支援し、5月には会の100回を記念し昼食会を行い、9月にはインドの元MRA(現IC)専従だったジョッティ・スブラマニアンさんをゲストに迎えてお話を伺いました。ICよつ葉会は今後とも様々な活動を通して、お互いの親交を深め、助け合い、今後のICの発展にお役に立てるよう努力してまいります。尚、会の詳しい活動報告は、後日小冊子を作成する予定でおりますので、それを参考にしていただければと思います。

ICよつ葉会実行委員会

IIAJニュース104号の発行が遅れましたことをお詫び致します。この機関紙に関しましてご意見等ございましたら、どうぞIC事務局までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。